

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第68号

● Contents ●

Topic: "An Encouragement of Learning" in the Fushimi Period. (ISOBE Akira)	1
Northeast Asian Reports: Delivering the Fact: 'Guryongpo Modern Culture and History Street' in South Korea and Japanese Mass Media. (KIM Hyeon-jeong)	2
Multicultural Challenges in Korea. (LEE Sun-hee)	3
Members' Forum: Baitoushan, the Great East Japan Earthquake, and the Joint Research in East Asia. (TANIGUCHI Hiromitsu)	4



戦国大名による学問のすすめ

東北大学 東北アジア研究センター教授
(中国研究分野)
磯部 彰



豊臣政権に参集し、徳川政権下で所領を安堵された戦国大名は数多くあるが、領地の石高に関わらず、とりわけ特徴的な書籍を保有した。それは、宋代に出版された宋版と呼ばれる書籍の所有である。明代社会では、宋版の書籍は権威の書となり、教養の根源と見られて、社会のリーダーであった士大夫あこがれの書籍となった。戦国を生き抜いた大名らも明国に倣い、家に宋版を一種、もしくは複数所蔵した。

豊臣氏の全国平定後、戦国大名は、家門の樹立のため、家系図を整え、系譜に相応した備えを始めた。その一つが、宋版の蒐集であった。当時、茶器の名品を蒐めることも流行したが、それは一種の芸ごとの中での数寄者のなせるわざであった。これに対し、宋版など唐渡りの書籍や絵画などを備えるのは、「大明の士大夫」の心得に倣う学問と教養の証とみなされた。

日本の戦国時代を舞台としたドラマを見ると、多くは武家の本領発揮とばかりに戦場での命のやりとりを描き、炎上する天守閣をバックに物語や時代が急転廻して行くような構成になっている。その反面、伊達政宗や徳川家康などが幼少期に学問を修める場面を除けば、成人以降に書籍を読むような場面は滅多に出てこない。豊臣秀吉に到っては、全く書物の世界とは異次元に描かれるばかりである。最近の日本放送協会では、少しは真実を意識した台本で戦国美談を作り上げるようにはなっているが、やはり切った張った、或いは、忠君愛国的風情を中心に殺伐とした時代絵巻をくりひろげる。しかし、戦国大名は、いくさばかりではなく、書籍を蒐め、それより多くの知識や情報を手に入れて激流の時代を波乗りしたふしがあ

る。つまり、争いに勝つため、そして家門や平和を保つ手段が軍備とともに書籍の蒐集と読破にあったと考えていたようである。その象徴が、宋版の蒐集であった。当時の読書は、いわゆる四書五経を読むことと思われがちであるが、それはいささか一面的な見方である。四書五経は儒教の根本的書籍であるが、本文のみでは儒学の教えは理解できないというのが、中国の士大夫の考えである。これは朝鮮王朝の儒者・文官なども同じである。中国や朝鮮の文人はいずれも官僚になるため、必死に儒教や史書を本文に付けられた注釈、更に注釈の注釈（これを疏という）を読み込んで書物全体を解釈していた。日本の戦国大名は、儒学者になろうとも思わなかったから、儒教の根本書である四書五経をすべて読むというわけではなく、むしろいくさに有用な孫子などの兵法書といった漢籍を中心に読み、禅僧や軍師から占卜書などをきびしく教え込まれていた。

朝鮮王朝では、両班、とりわけ武官より格が高い文官は、中国流の学問的素養が求められた。そのため、朝鮮版の漢籍の他、宋元や明から輸入した原本で学問を積んでいた。韓国の歴史ドラマに登場する王宮や両班の邸宅には、調度品として書棚に朝鮮本が置かれている。これは一面正しいが、一面ではやや不正確である。朝鮮本に比べてサイズの小さい宋版や明刊本などは大切な書物として両班の邸宅にはあったはずで、歴史に即するならばそれらも描き込む必要がある。

日本や韓国、中国は、かつて、それぞれ独自の、そして共通する文化を持っていた。相互に相手の文化を理解することは難しいことではあるが、中途半端な形での理解に止まる時、様々なあつれきを生む。

テレビドラマの書棚にある本の話で止まればよいが、近隣が争うアジアの現状を見れば、現在・過去のすべての事象を正確に、かつ客観的に把握するべきであろう。文明には、文化という栄養は欠かせない。正確な知識、情報があってこそ永続する文明があるからである。

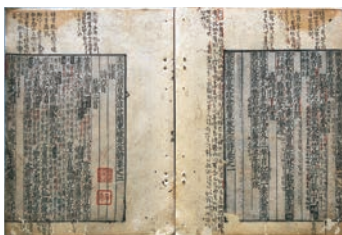


写真1. 福山阿部家旧蔵『王状元集百家注分類東坡先生詩』
(東北大学附属図書館蔵)

東北アジア通信

事実を伝えるということ

—韓国浦項市「九龍浦近代文化歴史通り」と日本のマスメディア—

東北大学 東北アジア研究センター助教
(日韓比較社会・文化論)

金 賢貞



韓国の各地には、1876年日朝修好条規の締結後日本統治時代（1910～45年）を通じて在朝日本人らの建てた日本式建築物がいまでも少なからず残っている。筆者は、この日本式建築物が韓国社会において2000年代以降「文化遺産」「観光資源」化することの意味や背景、現状などを調べてきた。朝鮮半島の東端に位置する慶尚北道浦項市南区九龍浦邑に作られた「九龍浦近代文化歴史通り」（写真1）はその事例の一つだ。ここは日本統治時代に九龍浦の中心市街地として栄えた「本町通り」を再現している。1930年制作の「慶尚北道九龍浦市街図」をみると、医院、薬局、旅館、料亭、洋服店、時計店、理髪店、畳店、米穀商、豆腐店など色々な商店が軒を並べた。これらのうち現存する30軒の建物を対象にファサード復元・屋内補修・改築を行い「近代文化歴史通り」＝日本人町を作った（写真2）。

九龍浦近代文化歴史通りは、地域経済の活性化をもくろんで造成された観光地といえる。韓国には「反日」「嫌日」の人が多そうだと思う日本人は、こんな場所を韓国人観光客が果たして訪れるのか、と疑いたくなるだろう。しかし、実際は、年間13万人以上（2013年）の国内観光客が訪れる浦項市の主要観光地の一つなのだ。日本の新聞やテレビは、日本人にとって意外なこの観光地に注目してきた。ただ、当地で調査しつづけてきた筆者としては首を傾げざるを得ない内容が多い。特に、2015年5月1日放送のNHK BS1『国際報道2015』（約8分）の内容がそうだ。指摘すべき問題は少なくないが、ここでは1点だけ取り上げてみたい。

同番組は、着物の着付けを体験したり、着物を着て日本式建築物の前で記念撮影をしたりする観光客を、インタビューとともに映し出し、韓国人に人気の「旧日本人街」九龍浦近代文化歴史通りを紹介した。このような意外な歴史的場所を復元したのは、「地方自治体」の浦項市と伝えながら、それを裏づける浦項市長のインタビューを流す。民間観光業者の女性にもフォーカスを合わせつつ、ナシヨナ

ルな政治レベルで植民地時代の歴史問題をめぐって対立を繰り返しているなか、日韓交流の場が地方自治体によって作られたことを評価する内容だ。同番組は、このような地方自治体の事業に「反発」する声もあるとして、「地元の郷土研究家」S氏の語りを取り上げた。ただ、同番組の字幕にもあるように、取材班はS氏に直接会ってインタビューしたのではなく、2012年10月12日放送の浦項MBC『時事共感99ポチャ』（第6回）に出演して述べた内容を一部だけ切り取って流しているのだ。同番組は、S氏の約10秒間の語りに「明らかに間違いだ 植民地支配という『暴力』が観光資源になりかねない」という短い翻訳テロップを付けた。ここで、S氏は日本式建築物の復元＝観光資源化に反対する「反日」の韓国人の象徴のように取り上げられたのだ。しかし、S氏は韓国語で「いまの…ゆく方向は、推進する方向は明らかに間違っています。なぜならば、これは、観光資源化するとしながら、暴力を観光資源化する可能性があるからです。」と述べており、問題なのは、「地方自治体」の「推進する方向」だと述べている。

S氏は2005年から、長年行政から放置されてきた日本式建築物の文化財登録や観光化を推進するために住民たちの賛同を集め、行政に働きかけた人物であり、筆者とも付き合いがある。彼は日本語ができないので、この番組を見たとしても、自分の語りが取り上げられた理由・意味は分からないだろう。

ジャーナリズムは事実に基づいたものでなければならず、客観的事実を大衆に伝えるために徹底した取材は欠かせない。上記の番組におけるS氏の語りの取り上げ方は、研究の世界で「まごびき」といわれるものであり、内容全体の信憑性を失墜させかねない。様々な情報で溢れかえる現代、事実を追求するジャーナリズムだけでなく、伝えられる情報の質を見極める冷静なまなざしも求められている。



写真1. 九龍浦近代文化歴史通りの入り口



写真2. 改築中の日本式住宅

東北アジア通信

「モザイク社会韓国」への挑戦

東北大学 東北アジア研究センター 教育研究支援者
 (現代中国社会的変容に関する文化人類学研究ユニット)

李 善姫



1. 韓国、「単一民族神話」の社会から「多文化」社会の時代へ

2005年に韓国の国会で在韓外国人や混血人の処遇改善に対する議論が行われた。その後、2007年「在韓外国人処遇基本法」と2008年「多文化家族支援法」の制定により、韓国社会はトップ・ダウン式ではあるが、「多文化社会」を本格的に目指すこととなった(写真1)。このような動きの



写真1. ソウルで「中国街」「延迎街」と称される「大林洞」

背景には、2000年に入って韓国男性と外国人女性との国際結婚が増えたという事実がある。2000年に約1万1千件だった国際結婚は、2005年に約4万2千件に増え、ある農村では10人中の4人が国際結婚という。その多くが斡旋業者や個人による「仲介婚」であることは、日本の東北農村の場合と共通している。このような国際結婚の増加の背景には、農漁村地域の花嫁不足、後継者不足という表面的理由に加え、社会に固着したジェンダー役割と家族中心福祉制度の問題があるといえる。韓国の「多文化」は、以上の背景のなかで「結婚移民者」の社会適応を当面の課題として始められたのである(写真2)。

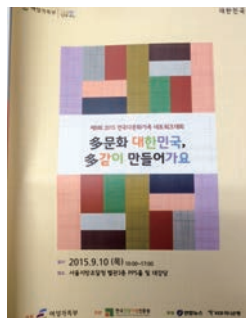


写真2. 第9回全国多文化家族ネットワーク大会のポスター(韓国の伝統パッチワークによって韓国のモザイク多文化を象徴)

2. 国家の支援と他者化する結婚移住女性たち

しかし、早いスピードで進められた「多文化」事業は、その対象となる「結婚移住女性」たちを「他者化」する結果にもつながった。2009年、全国の国際結婚家庭＝「多文化家庭」を対象に行った実態調査では「多文化家族」の約60%が月収入200万ウォン(約20万円)以下の低所得層であることが明らかになった。その調査は、マスコミを始め、政府関係者、学界、そして各団体らに結婚移住女性への支援の必要性を訴える資料となった。韓国の企業・自治体、社会福祉団体、宗教団体は、先を争う形で「多文化家族」の支援に乗り出した。しかし、過度な支援は、可哀そうな結婚移住女性というイメージや「国際結婚」＝貧しい低所得層という偏見を増長することにつながり、「多文化家族

という言葉が差別用語になったという指摘もなされた。最近韓国では、国際結婚家族が自らを「グローバル家族」と呼んでいるらしい。低所得層のイメージが付いた「多文化家族」との差別化を図っているのだ。

3. 結婚移住女性：支援の対象から自立した構成員を目指して

昨年、筆者が行った韓国のフィールドワークで、韓国の「多文化」事業の実務者たちは口をそろえて2015年はここ10年間の韓国の「多文化」に大きな転換期だといった。どんな意味なのか。これまでの10年間の「多文化家族」支援が、結婚移住者の韓国社会への適応を手伝うものだったとすれば、これからは結婚移住者の自立に焦点が当てられるということだ。そのため、全国211ヶ所の「多文化家族支援センター」では、移住女性の自立のための資格取得を手伝い、社会の認識改善のための教育プログラムや人権教育を行っている。また、移住女性たちも移住民コミュニティを作って社会参画に力を入れている(写真3)。

韓国京畿道の九里市は、日本出身の移住女性が多い地域である。この地域で九里市の文化観光解説者として活躍している松本美保子さんは、地域で歴史クラブを作って勉強会をしている。10人の日本人女性でつくった当団体は、韓国歴史を学びながら、日本人女性の親睦と地域の観光事業への参画を試みている。昨年、伝染病のマーズで、日本人観光客が激減し、最近はあまり日本語で文化解説をする機会がないと松本氏はいう。結婚で来韓してから23年。社会活動をしなかったが、4人の子どもの育児もあり、活動はできなかった。やっと5年前から教育を受け、今の仕事を得了。歴史クラブは、移住女性たちの活動を奨励する助成金で始められたそうだ。韓国の「多文化家族」支援政策が、彼女たちの社会参画を後押ししていることは間違いない。もちろん、韓国の多文化には問題も山積している。結婚移民者に限定された手厚い政府の支援にもかかわらず国際結婚の高い離婚率、毎年発生する夫による結婚移住女性の殺害事件、社会的偏見と外国人嫌悪現象などなど。今後、これらの問題にどう対処しながら韓国社会が「多文化社会」に移行していくのか。「モザイク社会韓国」の今後にもこれからも注目したい。



写真3. ソウル永登浦区の住民センターの入り口に移住女性らが描いた壁画

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。
 今回は、東北大学名誉教授の谷口宏充先生に白頭山に対する日中朝韓共同研究の現状と課題についてお話をさせていただきました。東北大学東北アジア研究センターの教授を務められた谷口先生は火山岩石学・火山地質学、マグマ物性、火砕流観測、火山爆発、白頭山10世紀巨大噴火、火山探査移動観測ステーションMOVEの開発など幅広く研究しておられます。

白頭山、東日本大震災と東アジア共同研究

東北大学名誉教授 谷口 宏充



昨年、私には思いもかけない連絡が知人より届けられた。北京で“白頭山シンポジウムを日中朝韓4ヶ国で開きたいので話をしてほしい”との趣旨である。しかも主催を見ると、実質的には韓国と朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との共催になっているのではないか。いつの間にそのようなことが可能になっていたのだろうか（写真1）。



写真1. 白頭山の山頂にあるカルデラ湖“天池”

手前は朝鮮領で湖面に降りるケーブルカーの路線が、真向かいには中国領で長白瀑布への谷が見える

思いだしたのは2011年3月11日の津波で被災して4週間ほどの頃のことである。まだ後片付けに追われながらやっと使えるようになったインターネットを見ていると、韓国と朝鮮とが東日本大震災を契機に、白頭山の噴火危機について協議を始めるとのニュースを見つけた。2002年から始まり2005年まで続いた群発地震や山頂隆起など火山活動の活発化、そして東日本大震災の発生を経て、朝鮮では白頭山噴火への危機意識が高まり、韓国へ共同研究の協議を申し入れたものである。その後白頭山に関する両国の接触は、専門家会議として2011年3月末と4月の二度にわたって実現した。しかし韓国の報道によると、どうも研究の進め方をめぐって喧嘩別れに終わってしまったようである。

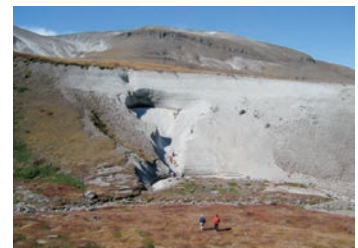


写真2. 白頭山の朝鮮側山麓に見られる10世紀巨大噴火の噴出物
過去2000年間では、世界で最大規模の大噴火であった

このような経緯から冒頭の感想はでた。しかしこの感想には別の個人的経緯も関係する。私は2000年ごろから中国と白頭山の共同研究を始めていた。すると2005年、朝鮮から日本火山学会宛に研究協力の要請があり、私に対応の依頼がまわってきた。当時、私は白頭山10世紀噴火の研究を行っていた（写真2）。研究を始めてしばらくすると、中国吉林大学の金教授から白頭山で異変が起きているとの話を聞き、さらにその後、中国地震局の魏助教授からはより具体的な地震や地殻変動などの情報を得ることになった。どうも白頭山では本当に活動が活発化しているらしい。そのため研究目的に白頭山噴火の可能性も加え、日中朝3ヶ国で研究を行うことにした。この3ヶ国の研究者が集まり、2006年には中国長春市で、2007年には北京市で協議を行った。北京では韓国からも新たに加わった。協議では朝鮮における地質調査や火山観測体制の検討も含めて、具体的な共同研究プランが煮詰まっていた。しかし“好事魔多し”の例え通り、ここで難題が発生した。拉致やミサイル問題などで朝鮮との関係は更に悪化し、また南北朝鮮関係も良好ではないようだった。こうして白頭山の日中朝韓初の共同研究は暗礁に乗り上げてしまった。

このような状態の時、東日本大震災が発生した。私はそれまでに古文書をもとに確実に思われる噴火年代を調べ、日本における巨大地震との相関を検討していた。その結果、両者には時代的に良い相関があることに気がついた。また国内で地震や噴火が多発する“活動期”の仮説は、どうも朝鮮や中国を含めた東アジア全体でもあてはまるのではないかと思い始めていた。今から約300年前の1700年頃、日本ばかりでなく朝鮮半島でも有感地震が多発した時期がある。単に有感地震ばかりでない。その頃、中国でも朝鮮でも国史上最大級の地震や白頭山噴火が発生し、日本でも宝永大地震や富士山大噴火が発生していた。これらの事実は火山学ばかりでなく、東アジア全体の自然災害や地域の安定を考えるうえで、また日本の火山活動を理解する上でも大変重要である。今、白頭山をめぐる国際共同研究に韓国はもとよりイタリアや英国も名乗りをあげている。このような時、噴火経験も豊富で、白頭山研究を100年近く進めてきた隣りの我が国が、朝鮮からの要請もあるのに、国として積極的な行動は何もせず、ただ傍観を決め込むのはまことに無念であった。



本号の「論点」では、磯部彰教授より、「戦国大名による学問のすすめ」と題する記事をいただきました。また韓国特集として、本センターの金賢貞助教と李善姫教育研究支援者より、韓国と日本の関係に関わる興味深い記事をいただきました。また「会員の広場」には、本学名誉教授谷口宏充先生から、先生のライフワークである白頭山火山と東日本大震災を東アジア研究の課題として論じていただきました。ホットな話題が多い領域ですが、それぞれ斬新なアプローチになっています。（岡 洋樹）

“Ushitora” is a Japanese word for the “Ox-Tiger”; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第68号 2016年3月25日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 東北大学東北アジア研究センター一気付
 PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp